

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議石垣部会（第27回）

議事録

日 時 平成30年6月1日（金）10:30～12:00
場 所 名古屋能楽堂 会議室

出席者 構成員

北垣 聰一郎	石川県金沢城調査研究所名誉所長	座長
赤羽 一郎	愛知淑徳大学非常勤講師	副座長
宮武 正登	佐賀大学教授	

オブザーバー

中井 將胤	文化庁文化財部記念物課文化財調査官
洲崎 和宏	愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室室長補佐

事務局

観光文化観交流局名古屋城総合事務所
教育委員会生涯学習部文化財保護室

議 題

- ・名古屋城総合事務所の平成30年度の調査・研究体制について
- ・天守台外部石垣発掘調査のまとめと追加調査について
- ・小天守台周り石垣の発掘調査について
- ・平成30年度本丸搦手馬出周辺石垣修復工事（案）の概要について

配布資料 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 石垣部会（第27回）資料

事務局	<p>1 開会</p> <p>2 あいさつ</p> <p>3 構成員、オブザーバー、事務局の紹介</p> <p>4 今回の会議内容について</p> <p>まず資料の確認をいたします。会議次第がA4、1枚。座席表がA4、1枚。会議資料が、今回4つの議題があり、資料の1から4が各1部ずつです。</p> <p>それでは議事に移ります。本日の会議の内容ですが、1点目として名古屋城総合事務所の平成30年度の調査・研究体制について、天守台外部石垣発掘調査のまとめと追加調査について、小天守台周りの石垣の発掘調査について、最後に平成30年度本丸搦手馬出周辺の石垣修復工事(案)の概要についての4項目です。こちらについて、意見をいただければと考えています。よろしく願いいたします。ここからの進行については、北垣座長に一任したいと思います。北垣座長、よろしく願いいたします。</p>
	<p>5 議事</p> <p>(1) 名古屋城総合事務所の平成30年度の調査・研究体制について</p>
北垣座長	<p>それでは早速、いただいた資料について事務局より説明をいただきたいと思います。まず資料1、名古屋城総合事務所の平成30年度の調査・研究体制について、事務局より説明をお願いします。</p>
事務局	<p>今年度最初の石垣部会ですので、今年度の私どもの調査・研究体制についてご紹介いたします。資料の1をご覧ください。名古屋城総合事務所の組織図を示しました。名古屋城総合事務所は、大きく管理活用課と保存整備室に分かれています。学芸員は、管理活用課で2名です。こちらは、考古学を専門とする学芸員が1人と、民俗文学を専門とする学芸員で、収蔵資料の管理などを行う学芸員が2人配属されています。保存整備室には、学芸職の主幹が1人と、学芸職の主査、こちらは兼務になっていますが主査が1人ついています。その上の四角を見ていただくと、学芸員として3名配属されています。こちらは考古学の学芸員が2人と、美術を専門とする学芸員が1人で3名となっています。それに加えて学芸嘱託員というものがあります。学芸嘱託員は、考古学の学芸嘱託員が2名、歴史を扱う、文書を研究する学芸嘱託員が3名。その他に、写真・資料の貸し出し等を行うための学芸員として、もう1人学芸嘱託員がついています。そちらは下の表状のものを見ていただければと思います。今、所属別にご案内いたしましたが、こちらは専門別と言いますか、専門としている学術・分野別にお話しいたします。平成30年度の学芸員体制をご覧ください。主幹、主査は、2人とも考古学を専攻としています。その他に学芸員として3名、美術の学芸員が1人、民俗の学芸員が1人、嘱託員ということで考古が2人、歴史の嘱託学芸</p>

	<p>員が3人、資料の担当等をする嘱託学芸員が1人です。今年度は13名の学芸員、学芸嘱託員の体制で調査・研究にあたりたいと思っています。</p> <p>昨年度の比較で言いますと、考古学専門の学芸員が、昨年度のスタート時点では1名でしたが、今年は3名ということで2名増員ということになっています。美術と民俗は同じ数ですが、学芸嘱託員考古、学芸嘱託員歴史と書いた5名の分が増員となっています。ただし学芸嘱託員の考古については、まだ空席となっています。欠員状態となっていますが、近々採用の募集を考えています。できるだけ早く、そこは埋めたいと思っています。</p> <p>石垣等の調査に直接携わっていく学芸員としては、考古学の学芸員ということになると思います。昨年度に比べて、人数としては1名から3名ということで増加しています。ただし人事異動がありまして、これまでいた学芸員に代わって、いずれも新規の学芸員が3名ということになっています。教育委員会から変わってきた学芸員が2名と、新規採用の学芸員が1名です。人数としては充実と言えますか、増えましたが、調査・研究体制としては、人数が増えたからいきなりその分ということはないかと考えています。</p> <p>嘱託員に関しては、文書の調査・研究をする学芸嘱託員が3名増員になりました。今まで名古屋城の歴史的な文書に関する調査・研究が十分できていないというご指摘も、以前いただいていました。今年から3名増員し、調査・研究に携わっています。こちらについても、3名と人数は増えましたが、いきなり十分にできるかというところもあるかと思えますけれども、その第1歩、スタートを切ったという状況です。</p> <p>今、学芸員の体制、人数、所属等についてご説明いたしましたが、途中でも申し上げたとおり、人数が増えたからといって、いきなり調査・研究がすぐにできるということではないという認識はしています。そのところは、先生方のご指導を仰ぎながら、できるだけ調査・研究体制の充実をめざしていきたいと思っています。それにあたって、嘱託員を含めて若い学芸員も入ってきましたので、できるだけ多くの研修、調査能力向上、あるいは研究能力の向上の機会を作りたいと考えています。あわせて名古屋城の内部の学芸員間の意思疎通も、できるだけ協力して、一刻も早く調査能力を高めていくことに努めたいと考えています。</p>
北垣座長	先生方からご意見、ご質問等がありましたら、よろしくお願ひします。
赤羽副座長	平成30年度の学芸員体制の中の学芸嘱託考古2名、歴史3名、学芸嘱託員1名ということですが、これは上の組織図でいくとどこの話になるのでしょうか。この6名の方は。
事務局	上は、正職員だけの組織図になっています。一番下の学芸嘱託は、今管理課に所属しています。残りの学芸嘱託考古、学芸嘱託歴史のそれぞれ2名、3名は保存整備室の仕事をするということになっています。所属としては、そういうふうになっています。

赤羽副座長	<p>昨年まで石垣の調査・研究を中心になってやっていただいた方が、お辞めになったということで、残念なことでありますけれども。今回の人事、組織が、辞めた方の単に補充というだけではなくて、調査・研究体制をしっかりと整えてやっていくんだということで。それなりに名古屋城というのは、重要な、本質的な価値を持つ城ですので、その本質的な価値に対応するような調査・研究体制を確立して行ってほしいというお話です。</p> <p>2番目には、現場の主体性といいますか。委託ではなくて、直営で名古屋城に対して責任を持って調査をする体制を、組織とともに作り上げて行ってほしいと思います。</p> <p>3番目に、これはかねがねお話していましたが、調査員の、特に石垣の調査員の中の意思疎通とかですね。相互連絡の体制も、これから非常に大事になってくると思います。調査員間の、活発な意見交換や意思疎通を図っていただきたいと思います。そのへんでは、上の組織図のほうで少し関わりがでてくるというふうに思いますが。抜本的な調査体制、主体的な調査体制、それから調査員間の意思疎通をより密にしていく、これまで以上に密にしていくということをお願いしたいと思います。</p>
北垣座長	その他、ありますでしょうか。
宮武構成員	<p>補足の説明をお願いしたいです。大変重要なのは、動いていただく実働のマンパワーがどれくらいあるかということも、部会、委員会等で把握したうえで、こういうことをやってもらいたいということが言えるわけです。非現実的な注文をつけたところで、とてもできないことが発生するわけです。実働できる内容についての確認をさせていただきたいです。資料1の表の中の構成の職責、役割について確認させていただきたいです。管理活用課、保存整備室、この2つの柱ですね。名古屋城の従来管理されている石垣の修理や発掘調査の主担当は、保存整備室が主担当するということですか。</p>
事務局	<p>事業としては、保存整備室の事業としています。搦手馬出等については、これまでのいきさつ上、管理活用課の学芸員が実際にあたっていくことになるかと思えます。</p>
宮武構成員	<p>ここで言うと、管理活用課に所属している考古学の学芸員さんというのは、立てつけは保存整備室に所属するのではなく管理活用課に所属するかたちで、石垣修理についてはここからでてくるということよろしいですか。</p>
事務局	<p>今年度については、こちらの学芸員が搦手馬出等の調査にあたることを考えています。</p>
宮武構成員	<p>次年度以降は、管理活用課の学芸員さんは現場に出ない可能性もあるということですか。</p>
事務局	<p>今の時点ではということですが、来年度以降は、先ほど赤羽委員</p>

	<p>からもご指摘がありましたけれども、体制自体を検討していく必要があるかと思っています。来年度以降のことは、なかなか今お話しできないところがあります。学芸員としては、できるだけ管理活用課と保存整備室という分けがないようなかたちで、業務にあたっていきたいと考えているところです。</p>
宮武構成員	<p>頭数自体が足りているかどうかという、現場の話を心配しています。昨年まで実際に現場に立ってトレンチ調査を行い、石垣修理を、発掘調査現場で担当していた方というのは私の記憶では3名いらっしゃいました。今回増えたというお話ですけれど、主幹さんで考古学1人、主査さんで考古学1人、保存整備室の学芸員さんで考古が2人、さらには管理活用課の別のセクションであるところの学芸員が1人と。そうすると嘱託を除くと5名いるように見えますが、現場に立つのは何人いるのですか。</p>
事務局	<p>昨年度の3名というのは、名古屋城としては1人と、あとは教育委員会から来ていただいていた学芸員2名だと思います。今年については、主幹、主査が現場にどこまで出られるのかというのは、なかなか難しいところがあるかと思っています。実働としては、学芸員考古3名と、嘱託員もできるだけ現場へ出ていくことになると思います。</p>
宮武構成員	<p>つまり変わっていないですね。結局3名が3名のままでですね。何を言っているのかというと、所属が、他のところから臨時にかり集めてきた人員を、保存整備室の直属に配置換えしましたという言い方なんですけれども。現場のマンパワーが増えたかどうかという話で言ったら、増えたのですか。嘱託は現に、2人入っていません。今、どこの嘱託採用も大変ですよ。受験してくれませんか。入れられるかどうかという大問題を抱えているわけですが。例えば、村木主幹さんも現場立つんですか。</p>
事務局	<p>フルに現場で責任を持つかたちでは、おそらく難しいと思います。また、実際に責任を持ってまわせるというのは、今の時点では正職さんということです。</p>
宮武構成員	<p>そうですね。お忙しいですもの。こういうことなんです。増えてないんですよ。マンパワーは全然変わってなくて、所属だけは、肩書を変えたというのが困るんですよ。今、作業から何から大変なわけでしょう。人手が足りない状況で、肩書だけ変えて頭数揃えたりしてはダメですよ。実際に稼働する人間が増えないと。 赤羽先生が、こういうことでは継続性がない、直営のかたちで、受託でもってクリアしていくようなものではなくて、実際に動ける人員を増やしていくということは、そういうことではないですか。</p>
事務局	<p>今年度については、この体制ということになりますが、次年度以降ご指摘もふまえて、できるだけ確保していきたいと考えています。</p>

宮武構成員	現状維持ですね。
北垣構成員	<p>今の体制は、両委員がお話されたとおりです。管理活用課、保存整備室の両方にわかれて、とりあえず頭数だけなんとか揃えていると。現実の問題として、後で出てきますけれど、搦手馬出の問題についても、10年、現場としてかかっているわけです。これがまだ解決されていないと言いますか、これから積み上げの修復工事が始まります。そういう中で、最初に言われたように、一番現場に精通されていた方がすでにおられない。その中で新しい力でもって、これからやっていかれるわけで。特にいろいろご報告をいただくことになるかと思えます。おそらく大変な状態です。それからまた、現在進められている大天守台、大も小も含めてですけれども、いずれにしても人が非常に不足しているということとともに、ひとつの一体化した中での仕事をしていかないと、1が2にならないし、3には絶対になりません。そういうことも含めて、今伺った体制をさらに充実していただく必要があると思えます。これからの話の中で、いろいろな課題が出てくると思えます。</p>
宮武構成員	<p>所長さんがいるところで聞きたかったのですが。役所の内部の構成というのは、看板になっているセクションが変わったならば、任命権者の問題上どうしたって柔軟性がとれないのは承知しています。両方の活用課と保存整備室の2つに分かれている状況で少なくとも置き取りは、従前から搦手馬出石垣の修理・修復にあたってきた方の枠が入ってしまっている。次年度以降は、どうなるかわからないでは困るんですよ。完成するまでは、この両方のセクションをまたげるようなかたちで、確実にこちらに所属している学芸員の方は、途中でどういうふうになるかわかりませんよ。増えてもらわなければ困るのだけれども。責任をもって最後まで、ここの構成の枠だけは、搦手の石垣を含めた担当に責任を持っていただけると。というのは、所長さんによくよく認識していただいきたい。冷静に考えると、3対3で頭数が一緒のように見えて、そのうちの1名は去年までずっと搦手の石垣修理から名古屋城のことをやってこられた専門の方です。この方が辞められて、新しく配属された方、そういう状態での3対3ですからね。新しく来られた方、これから大変な苦勞をされて、本当にご苦勞さんとか、お気の毒というか。ただ、あえて言わせていただければ、今の時点での戦力は、減ですよ。実質的に。そこのところをよくよくお考えください。外面上は増えたという主張は、私はあたらないように思います。</p>
事務局	<p>人数の問題に加えて、調査・研究の能力という点でご指摘をいただいたと思えます。私どももお話をいたしました。その点は十分認識しています。今後どういう方向で調査・研究能力を高めていくかというところは、先生方にご相談しながら一刻も早く調べていきたいと思えます。まず現有勢力の能力を上げていくということが、当面の対策と思っています。今後ともご指導をいただけるようお願いいたします。</p>
北垣座長	それでは次の議題に移ります。資料2ですね。少し厚い資料です

	が、天守台の外部の石垣の発掘調査のまとめと追加調査ということで、説明を事務局からお願いします。
	(2) 天守台外部石垣発掘調査のまとめと追加調査について
事務局	<p>本日は中間報告と言いますか、出土遺物等の完全な分析などが終わっていませんので、完全な報告ではありませんが、現在わかっていることを、主に写真等でご報告いたします。最初に、2ページのところに、今回調査した天守台周辺の調査地点の図があります。地点と区というように、きっちり整理されていませんが、同じものと考えていただければいいと思います。A区からN区、A地点からN地点まで全部で14地点、14区の調査をいたしました。その中1か所、A区だけが本丸の中です。皆さんにご覧いただいている東側の地点が1つ。残りは全部内堀です。中での、石垣の周辺の調査です。特に、AからJのうちE区を除く9地点で、直接大天守台に関わる部分の調査になっています。</p> <p>資料としては、A地点からN地点まで1ページずつくらいで写真や図とともにご紹介しています。図面については、まだ十分な校正等ができていないところもありますので、必要なところだけを入れました。本来ならA地点からきちんとご説明できればいいんですけど、時間のこともありますので、主な要点についてご報告いたします。</p> <p>まずAのところ、本丸の上のほうです。内堀等、事情が違いますので説明いたします。天守台の東側のところですが、今でもご覧いただけるように、第二次世界大戦の被災状況がはっきりと見える壁面です。基本的には、下のほうの被災を受けているあたりについて、築城時と言いますか、慶長期の石垣が残存しているのではないかと考えている場所です。そちらを掘って調査していくと、被災した状況が非常によく残っています。必要以上にそのあたりは触らない。これも貴重な歴史遺産なので、触らないことにしました。すでに攪乱されている溝を利用して掘り下げたところ、地下の部分もしっかりと、おそらく築城時と思われる1石材がありました。下のほうは、築城時の盛土等で途中まで埋められています。築城時と思われる土が遺っている状況が見られましたので、健全な状態と言いますか、安定性は保たれている、特に変動はないということで、本丸については観察いたしました。残りの内堀のところ、特に大天守台のまわりについてです。東のほうからいくと、BとかCとか、大前提として、特に最近、麓先生の研究などもあり、よく調べているところで、宝暦という、築城時が1610年頃とすると、およそ150年後ですね。1750年くらいの宝暦年間に、石垣の、木造天守の修理がされています。その時に石垣をかなり修理したことが、文献的な記録としても残っています。そういったところが、今の観察からもある程度はわかります。</p> <p>まず東側のB、Cのところについてです。Bはかなり上方部分なので、地表付近はしっかりしているとか、慶長期の、築城時の石垣ということが認識されていましたが、トレンチを入れてみたところ、わりと健全な状態で、盛土と言いますか、築城時の土もしっかり遺っていたので、特に異常は認められなかったところです。ただし周</p>

りには、宝暦期と思われる修復の土の堆積なども見られました。築城時の盛土もしっかり遺っていることが、よくわかったところです。

C 区の隅角の部分は、非常に大事なところと思っています。上から7石目くらいから、宝暦の積み直しと言われています。下のほうは築城時、慶長期の隅角の状況をよく遺しているのではないかとということで調査をしたところ、慶長期、築城期の積み石の状態が出てきました。右下にある赤っぽい石が、一番底石になるかどうかというところです。掘削はここで止めていますので、この石が一番基底部の石、俗に根石と言っている石にあたるかどうかは、まだこの調査では判定はできませんでした。C 区のところは、6 ページにあるように、底部にあったようなしっかりしたブロック状の土の入った、粘土質の入ったブロック痕土と呼んでいる盛土層です。ひっくり返すとブロック状に粉々につぶれて、それをすぐに埋め戻すとそういった状況になりますが、その土がまったく見られませんでした。砂質の層が多かったため、正直ここについては千田先生のご指摘がありましたように、なかなか土層を、掘り方等も含めて難しいところです。今、検討している中で、地山はかなり高いところのラインが妥当なのかと考えています。それに伴う地形根切、石垣を構築する際に少し掘り込んで、そこに石垣を積んで、根切のところに礫や捨石を入れながらしっかり埋めていくことで、安定させるということをしているわけです。そのラインを、一応想定ができるのではないかと、今検討しています。そうすると隅角のところ、ひとつはいいのですが、そこから西へいくと途中で、北側のほうは宝暦の修理の跡が出てきます。

そのところで真ん中の、例えばD 地点です。地上部のところが、宝暦時の改修ではないかという石がありました。地下を見てみると、すぐに次の段からは築城期、慶長期の積みでいいのではないかと、境界線が引けるのではないかと考えています。細かい地形根切とか、盛土、写真D の一番左の壁あたりの土は、先ほどから言っていますブロック痕土の盛土と考えています。そこから地形根切があります。この場合は、積み直しは地上ぎりぎりの段のところなんですが、宝暦の改修の時と思われる、決定的ではないですが、地形根切と同じような感じで石垣に向かって掘込があります。修理の際に、少し下まで掘って、下の根石近くの状況まで様子を見ているのではないかと、状況が観察できました。これは西側の H 地点でも同じような状況が出ています。それがなぜわかるかというと、宝暦の土と思われるところに瓦が入っていました。逆に言うと瓦が入っていて、それを注意して調べることで年代がわかってきます。今のところ見ている感じでは、新しい瓦は入っていないので、宝暦期までの、江戸時代中頃までの瓦片ではないかと考えています。その時の修理で掘ったのでないかと考えられます。

次に重要なところで F 地点です。北西隅にあたります。ここでわかったのは、宝暦期と呼ばれている修理は、この北西隅が一番顕著です。隅角の石が地上部では、観察で言えばほぼ全部取り換えられているということが、観察されています。1 石分下へ掘り下げてみると、F-3 の写真をご覧ください。これは、他の積み方の石に比べると小さめです。巨大な天守台を支えるには、少し大丈夫かなと思われる石です。ただ、ここで観察してみると上半分が青白くなって

います。これは新たに、本来の石の勾配を、角度を少し削って、上の宝暦期の修理の隅角の勾配に合わせているのではないかと思います。なぜわかるかという、これを延長させて土を見ていきますと、旧堀底、戦前の、長いこと本来の堀底であった面と合致してきます。ということで、新たに、前にあった角石を移動して、ただし角度は新しい石垣に合わせているのではないかとこのところでは。角石については慶長期と言いますか、築城期の石をそのまま利用している可能性が高いと考えています。

あとH地点、11ページをご覧ください。西側ほとんど、見る感じでは、宝暦期に直された石垣に見えてしまいます。ただ地上の部分は明らかに宝暦期ですが、掘ってみると、すぐその下の段から積んだ状態とか、石の積み方とか、段があったり、間詰石の感じも少し違います。地下の部分については、築城期、慶長期でいいのではないかと考えています。それと同じようなことがG地点でもありました。写真のG-2で見られるように、細かい石が地下の1段目の石のそばに入っていたりしています。ここは宝暦の直しに伴う可能性もあるかと思っています。ただ調査が、あまり掘りすぎてもいけないものですから、慎重にということでここで掘削を止めました。可能性としては、この段まで宝暦期の改修が終えると考えられますが、おそらくもう1段くらい石があると考え、慶長期の根石がG地点、G、Hのある西側の面も、慶長期の石垣の基盤の上に宝暦期の改修がなされているのではないかとこのところでは観察をしています。それを最終的に決定づけるかたちで、I地点です。南西隅になります。南西隅の角ですが、一番安定した状態で土層土を観察することができました。13ページの図面をご覧ください。一番下の赤い線が、地山と言って最初に堀底として掘っていく、堀を造る時にそこまで掘って、その上に盛土、ブロックが混ざった土や砂質の土を積み上げて整地していくわけですが、外角にまた地形根切を掘り込んで、石垣を据えていくという状況が見てとれました。地形根切を切ったところには、石垣を組んだあとに、前のほうに、あまり抑えとしての機能はないかもしれませんが、礫を放り込みながら砂質の土で埋めていくという感じで、埋め戻しがされていました。大変しっかりした慶長時の隅角の下の部分が観察できたと思っています。上の部分については、宝暦の改変が顕著に現れてくるところですが、そのあたりは今行っている壁面の詳細調査等で、しっかりと地下の状況とあわせて観察して考えていけば、天守台の石垣についていろいろわかってくるのではないかと考えています。

最後がJ地点です。大天守のまわりの一番重要なところ。J地点は、以前も1回掘削をしたことがある場所です。清正石垣、清正が造った天守台石垣の特徴であるのが、家臣らの名前を大きく刻印をした石ですね。これが北西では失われていますが、北東では小代下総とか、小天守台のところで、大天守台の南東や、小天守台の南西あたりの刻印が、家臣の刻印名が残されています。その中で知られてはいたけれども全容があまり紹介されていなかった、中川太良平さんの刻印を全部、下まで出してみました。その下との関係を見てみても、しっかり間詰石も残っており、不安定な要素はありませんでした。天守台石垣については、築城時の面、基盤と言いますか、根石が状況としてはよく遺っているのではないかと考えて

います。部分的には、宝曆等の改修が地下のところで、境界部分などが観察されたという報告になるかと思います。

残りのEとGの西側、K、L、Mです。まずK、Mについては小天守側です。橋台と小天守側の入角、凹んだところになります。曲部の内側です。その部分については、復興天守を造る際の盛土などがあり、他のところよりも1mくらい深くなってできない状況でした。しっかり下げていくと、下のほうは盛土はなくて、その代わりにしっかりと石が詰められていた状況も観察できました。L、Mについては、小天守側の角については、濃尾地震の時に崩れて、ゆるんで修理したという写真が残っています。それを基に検討したところ、濃尾地震の時の修理の際の地形と言いますか、当時の影響が土の土層に現れてきています。このあたりはまた、しっかり報告の中でご紹介したいと思っています。

最後に、西側のところについてです。NとG、Eについてです。全体についてざっと言いますと、天守台に比べると根石が少し浅い傾向にあります。積み方も少し荒々しいというか、雑といいますか、少し工事的にはレベルが下がるような感じがします。後世の積み直しも何か所か見られました。こちら、前回、宮武先生からご指摘がありましたけれど、状況についてもう少ししっかり検討していきたいと思っています。ご指摘のあったN地点ですが、少し説明いたします。こちらに見える根石と思われる石が、このあたりもはっきりしませんが、細かい石が出ています。この礫等は、こっち側に白っぽい土が見えます。ここの白い土については、礫はありますが瓦を含まない盛土層の一部と考えられます。こちらの瓦の下のほうに、ずっとラインとしては延びています。白い土は壁近くの部分的な状況ですが、同じように無遺物と言いますか、瓦を含まない層が、こちらのほうにラインとして続いていきます。上にある瓦の層については、出土した遺物を現在検討中ですが、上の地表土などと比べると、新しい瓦と思われる瓦は含んでいないと、今のところ考えています。江戸時代の半ばくらいまでの瓦でいいのではないかと、今は考えています。そのあたり、前の説明が不十分だったかもしれませんので、追加をいたします。GについてもEについても、根石が浅めかと考えています。また外まわりについては、しっかりと調査の成果を、見解をまとめていきたいと考えています。

まとめた話になりますが、掘り込みのところ、掘り込みと言います、前で言えば地形根切という言い方、「地」の「形」と書いて「ちぎょう」と読みますけれども、地形根切の状況を考えさせていただきました。まだ十分煮詰まっていないところもあるかもしれないので、またご指摘をいただきたいと思っています。最後の掘り込みですけれども、これについては戦災ガラと言いますか、戦災ガラがあると、直下で新しい、古い地表、いわゆる堀底が出てきます。その比較の図面です。地山がわかるところは地山のライン、高さを記入しています。こういったふうに眺めていけば、また新たな見解と言いますか、発掘調査としての成果というものを掲げたいけるのではないかと考えています。以上が昨年度までの調査の紹介です。

昨年度行いました天守台付近の調査の確認についてはその後、昨

	<p>年度の3月の部会の際に一度ご報告させていただきました。その後、現地指導もいただき、それを踏まえて、現在のところのまとめをご報告いたしました。3月の時にご指摘をかなり多くいただいています。例えば、C地点等の地山の認識が正しいのかどうか。あるいはG地点で、もう少し地形根切の跡が確認できるように拡張したほうがいいのではないかと。他の調査区でも、もう少し掘り込んだほうがいいのではないかとというご指摘もいただいていたかと思います。一部について、今C地点の説明をいたしました。その時点で対応できるものについては調査区を拡張するとか、ということで対応させていただいたのが、今日のご報告です。一部については、年度末ということもあり、すぐには対応できませんでした。先生方のご指摘を活かせないかたちになり、大変申し訳なかったと思っています。また、せっかくご指導いただいたことが、私どもの調査に上手く反映できなかったところもあったかと思っています。それについては、一部、追加をしてでもより詳細に調査をしたほうが良いと考えています。今の調査に加えて、この後予定している調査についてご説明いたします。</p>
北垣座長	<p>今、報告していただいたことについて、まず確認作業をしたいと思っています。先生方、ご意見等がありましたら、よろしくお願ひいたします。</p>
宮武構成員	<p>事実確認をしたいと思っています。前回の、前年度の最後の部会でもって、現地を視察した状況と変わっていないです。その段階での解釈が整理されたという判断でよろしいですね。追加で新しいトレンチが増えたというよりも、我々が見させていただいた状況とは、あまり変わっていないので。その上で再度整理した内容の確認をしたいと思っています。順番にいきます。</p> <p>6ページ、C区の部分です。この土層図を見ると、地形根切と思われるラインということで、1回地山の安定面を石垣の根石をはめ込むために切り落として溝状に掘って、その中に根石を入れて、前面を新たにかためて被覆して安定化させるという、ひとつの伝統的な技なんですけれども。この掘り込んだ中の土質というか、埋め込んである土というのは、どういった性格の、どういった構成土でしたか。</p>
事務局	<p>今回の調査で地形根切ではないかと思われた土は、C区とH区、I区あたりで確認できました。認識しているところでは、いずれも砂質を中心とした土で、それをかためるというような、それに礫を放り込んでいるような感じというところで認識しています。</p>
宮武構成員	<p>今見比べているのは、ページが入っていないですけども、一番後ろにA3版の折り込みでトレンチを通してつけてくれているのがあるじゃないですか。その中の最初のA3版のほうの図面で、名古屋城天守台石垣周辺発掘調査と。そのI地区のトレンチの南壁、6ページもそうですが、違うんですよね、これ。これは同じ場所ですか。違う場所ですか。</p>

事務局	同じです。
宮武構成員	西壁と南壁だから違うのか。
事務局	C区、N区、I区です。
宮武構成員	あっ、はい。ごめんなさい。ここで確認したいのが、同じ状況で、一番初めのI区の根切地形とされている、創建時の掘り込み部分は根切の地形ではないですか。
事務局	はい。
宮武構成員	こちらの土層には、ブロックのような礫がぎっしり書かれているんですよ。
事務局	はい。
宮武構成員	これは、こちらのC区の礫の構成土ではなかったということですか。
事務局	C区では、この礫はあまり観察されていません。
宮武構成員	I区などは、礫ですか。
事務局	I区は礫です。
宮武構成員	砂に礫？
事務局	砂質土に礫と考えています。
宮武構成員	どちらがかたいかという、当然のことながらI区のほうが、かなりガチガチの状態というか、石を入れ込んでいる状態。
事務局	ただ、隙間なく詰め込んだというのではなく、割と砂の中に石が、礫が混じって見える状況です。さほどガチガチには締まっていなかったというふうに認識しています。
宮武構成員	ついでにC区の説明が5ページに書いてありますけれども、5ページの説明文の下から4行目のところに、地山と推定した面で瓦を含む掘り込みを検出したと。これは6ページの土層図に、掘り込みは出ていますか。
事務局	ここでは出てきていません。写真で、C-3やC-4のところの、線を引いて石垣が少し赤っぽくなっていますが、そこが掘り込みです。瓦を含む掘り込みです。
宮武構成員	最終的に、この埋め戻しは、どのようなかたちで埋め戻したの

	ですか。
事務局	もう1度北東部を、先生方のご指摘があった後、こちらがまだ未掘だったので下げました。それを、ここで千田先生の指摘がありました、地表から40 cmくらいのところで探したところ、ここにこういうラインが出てきた掘り込みなんです、これは地形かと思ったら、中に瓦等が含まれていました。瓦の入った堀込。想定としては、宝暦期くらいの可能性が高いと思っています。まだ完全に分析しきっていませんので、想定としては江戸時代の瓦を含む掘り込みが検出できたということです。
宮武構成員	築城時かどうかは、わかりませんよね。
事務局	この掘り込み自体は、築城期ではないと思っています。
宮武構成員	最終的に、どのような手立てで埋めたんですか。このトレンチは、まだあいているんですか。
事務局	同じように深いところで、特に石垣よりについては、名古屋城では使っていない石を使った角礫を石垣のほうに敷き詰め、変動がなるべくないようにかためたと、手前のところとかは、発生土に重量で2%ほどの消石灰を混ぜ、改良土として含めて、かためて、あとは発生土等で埋め戻しています。
宮武構成員	安定しているという判断ですね。地山は調査の過程で取り外されてしまったという結果として、よほどここはかためないと、将来的に危ない場所なので、そこを懸念しました。 もう少し事実確認をさせてください。すいませんが、次回から早めに資料を送っていただきたいですね。一昨日に送ってくるんですよ、データで。紙ベースではないものですから、今一生懸命見ながら付箋をつける状態です。それが全然できませんから、検討するために少し時間くれるか、余裕を持って送ってください。 次に8ページのE地点の外側です。写真の、向かって前のほうに写っていますが、これの土層図がついていないんですよ。土層図がついていないので検証が難しいですが、石垣の下にいっぱい礫が出ています。この礫というのは、石垣の下に潜りこんでいるのですか。それとも石垣の前に被覆しているのですか。
事務局	まず、資料が遅れましたこと、大変申し訳ありませんでした。 E地点の礫についてのご質問ですが、下へ潜りこむものではなくて、この石の前に、前抑えになるかどうかとは思いますが、前抑えのような状況で入れられている石だと思っています。
宮武構成員	まだこの見えている土というのは、地山ではないわけですよね。
事務局	はい。地山ではなくて、状況からすると江戸時代の盛土の上に溜まっている江戸時代の土の中にあると考えています。

宮武構成員	安全上というか、石垣保護の観点から言うと、礫を取って、この石垣がどこまで地下に続いているかまでは確認していないということですね。
事務局	はい。言われるとおりです。
宮武構成員	G地点も、土層図がないのであれなんです。写っている写真の、石垣下、ここも何か小さな礫が落ちているような状況が見えますが。
事務局	どちら側ですか。2のほうですか。
宮武構成員	どちらもです。これは瓦ですか、前に落ちているのは。
事務局	これは、石です。石材で、刻印がありましたので、築石の一部が剥がれたものと考えています。
宮武構成員	左側は、何でしょうか。その前にもぼとぼと下に、いっぱい小さな礫が落ちていますよね。
事務局	G-2 が天守台側で、こちらは御深井丸側の石垣になります。下のほうに礫が入っていますが、この礫が入っている層というのは、瓦等は含まない。直上までは瓦を含んでいますが、礫がごろごろしているところについては、盛土の一部ではないかと考えています。
宮武構成員	いつ頃のですか。
事務局	築城時ではないかと考えています。
宮武構成員	もう1点、最後に13ページです。13ページのI地点の石垣の状況というのは、地山を削り取って根切をしているのではなくて、先ほどの連続するA3版で確認したのが、盛土を施してから切っている。地山本体を取り、ベースの土を直接ならして切っているのではなくて、一旦盛土で高めておいて切り直しているという場所は、ここは別にどこがありますか。ここだけですか。
事務局	Hがそうなるかと思います。図を入れていないので、申し訳ありません。
宮武構成員	A3版にHが入っていますが、これがそうですか。
事務局	そうです。ここで言いますと、地山と書いてありますよね。その前に9と10という数字があります。これが盛土であると考えています。それを下げて、掘り込んで、石垣を造っているのではないかという状況だと思っています。Iのところと同様と、その調査時は考えています。

宮武構成員	<p>この調査の視点というのは、おおよそ3つあると思います。天守台の石垣の根石部分が、江戸時代の宝暦を含めていろいろな改修を受けてきた履歴の中で、現在ダメージが生じているのかどうかの確認。これがまず1つ目です。堀というものの自体も、城郭を構成する重要な要素なわけですが、堀底自体が安定したかたち、しっかりとした曲輪と曲輪の間を支えるひとつの空間ですので、変状がないかどうかという確認がひとつ。それと堀の対岸、見学者が主に歩いている場所ですよね。御深井丸のほうもそうですし、天守台の北側の堀の対岸もそうですが、この石垣自体が安定しているかどうか。この3つの確認をするために今、いろいろ伺ったわけですが。</p> <p>大天守台側のほうでいくと、とりあえずどこも安定しているというお話ではありますが、例えばF地点。9ページです。それより前のところでした。7ページです。D地点の写真に、とにかく土層図がないのでどれも、困ってしまうんですね。D地点の土層図がないし、土層についての図が半分しかないの。これ明らかに正面の根石と思われている、向かってトレンチの右端の一番下の根石と、上の天守を支えている2番目の石というのは、ずれていますよね。</p>
事務局	はい。
宮武構成員	<p>厳密に言うと、前の1列に見えるラインから上の部分というのは、少し内側に引いて積んでいる状況ですよね。右側の写真のほうわかりやすいのかな。ずれていますよね。</p>
事務局	ここですよね。
宮武構成員	<p>はい。このずれというのが、変状ではなくて宝暦の段階に、大改修した時にセットバックをして向いている。問題はそれが慶長の根石から安定しているのかどうかというのは、どこでわかるのですか。前留めの石も何もありませんよね。普通こういううたいかたをしたならば、前にあごが擦り出してこないように、何か大きな石で抑えている。そういう処置とか。土層図がないので、とさんざん言っているのは、普通根切りをし直しているわけですから、前に安定するような盛土でもってガチガチにかためているかどうか、そういうものがないわけですよね。</p>
事務局	<p>ここについては、6ページの右下が西壁の状況です。左側が石垣になります。ここは石垣面になります。</p>
宮武構成員	<p>特にかためるような、前を広くして抑えつけるような盛土はしていないということですね。</p>
事務局	はい、していませんでした。
宮武構成員	<p>さらに9ページのF地点を見ると、前回現場で私が指摘したところでもありますが、本来の慶長期の石面というのは、面をあわせるために無理やり根石をカッティングして、右端が本来の正常な厚さ</p>

	<p>になるわけなんですよ。上の宝永の石垣にあわせるために、このくの字に削って、ここの出っ張っている部分を通そうとしている。荒っぽいことをやっていますが、ここの前は、何も抑えがないんですね。捨石も結局ないし。</p>
事務局	<p>はい。今ここにパラパラと見える石は、宝暦以降のものだと思っています。これも抑えにはなっていないとは思っています。</p>
宮武構成員	<p>今は一時的にこういう状況で見えていますから、これは安定しているという言い方はなかなか言いきれないと思います。これから起きる震災の、地震のエネルギーとかいろいろなことを考えれば、これでわかってきたことがまず何かと言うと、宝暦の時にもともとあった石垣との擦り付けで、相当乱暴なことをやっている。根石とのかみ合わせのために、後付けのようにむりやり面を削ってみたりしているんですけども。前から抑えているかという、施していない。ここはちょっと、この状態で大天守台は健全ですね、という話はいかがなものですかね。</p> <p>もうひとつは、堀底の関係とリンクしていると思います。それはA3判の2枚目の、あまり説明がなかったですが、戦災ガラ層直下地山層上面ラインの比較という内容です。今回初めて提出していただいたのですが、私は興味深くというか、これは重要なものだと見ているのは、このページの中のI地区、N地区、向かって右下の土層図の中の地山の位置です。ものすごい下がり方をしています。いきなり50cmぐらい下がっているのですが、右上の平面図で確認すると、本当に何メートルぐらいしか離れていないのかな。NからIの地点にかけて一気に50cm以上地山が下がっている。そこからG、F、Cと上のトレンチを見てみると地山が出ていない。同じところまで下げているのに。結局、ここから先、北側のトレンチで安定した地山が出た場所っていうのはないんですね、見ると。土層図が全然ないので、わからないですけど。これ、堀底がどういうことになっているのか、安定した状態の面があるのかということが確認されていないんです。なおかつ、見ると、今でも北西の隅側というのは湿潤で、水がぐちゃぐちゃ湧いているような状態でしょうね。底なしの状態のままトレンチをやって、安全面は見えていないんですよ。そこで先ほど伺ったのが、地山に頼らずに盛土を敷いて高めて、切り盛りをしている場所っていうのが、この世界で言うと、この大きく地山がガクッと下がり始めるところの大天守台の南西の隅角のHと、北側のCの場所。大天守台周りにはもう地山が届かないものだから、人工の盛土を施して高めた上で造っている可能性が高いということですね。この後の慶長の段階でもやはり大天守の裾周りというのは、非常にベース自体は落ち込んで水の溜まりやすい、現在も水が溜まっているわけですけども、その上に盛土をした上で、いわば嵩上げですね。その擦り付けをして造った、むりやり感がある土木で造った。これは土木工学的に安定しているかどうかは別の解析が必要ですけども。その上にさらに宝暦段階に、根石一列を残して少しセットバックするかたちで、ごまかして積み直しているのが北側の石垣だということが、これで判明したということです。</p> <p>それと3つ目の課題です。岸側の石垣は安定しているのか、とい</p>

	<p>う話になってくると、今日のご説明だとはなはだ危なっかしいのが、2 ページの全体範囲図の中の、人が歩いている堀の外岸にかかるトレンチの場所というのが、上からいくと、E と、G の一番左端と、M の3 か所までなんです、わかっているのが。問題なのはG と E が、土層図がないんですよ。土層図がないので、多くの礫というのは被っているものですか、下に入っているものですかと聞いているのは、一番心配なのはM です。これは最初の現場からお話をしていることですが、18 ページの写真で、先ほど江戸期じゃないかという、盛土について鑑定されていましたが、これも地山の上に乗っかっている石ではなくて、人工の堆積土、ないしは搬入土の上そのまま乗せちゃっている。下の搬入土自体が、いつの搬入土かというのは、先ほど木村さんは訂正して江戸時代と言われたけれど、ほか大丈夫ですか。下も切っていないわけですし。懸念しているのは、これよりも上の石垣というのは、とても江戸期とは思えない。明治、大正ぐらいの近現代的な特徴の積み方がいっぱいあるんですよ。つまり、濃尾地震ですとか、その後の災害で一回崩壊している。しかも勾配角度が80 度以上を超えて、ほとんど城郭の石垣としては耐久性がぎりぎりではないかというような、この外岸の下側は安定していない。盛土のままで固められているとすると、これはほかの箇所も含めて、本当に耐久性のある盛土であるのか。場合によっては、先ほどの衝撃というのは、ボロボロ落ちてきているものというのは、濃尾震災の後の後片づけですとか、新しく積み替える時に下敷きにしたものとか、そういう可能性も含めて考えなければいけないと思います。</p> <p>外岸の根石周りの安定度は、まだこれでは調査は全然わからない。3 つの視点の中の欠落しているものを補うような、追加調査計画をしていただきたいです。</p>
北垣座長	<p>非常に重要なご指摘をいただいているのですが、実は12 時というような時間設定をしているのですが、これは非常に大事なところなので、委員の先生方、ほかにご意見はありますか。</p>
赤羽副座長	<p>宮武先生がご指摘されたC 地区なんですけれども、6 ページの土層断面図と、同じものというのが、折り込みのA3 の名古屋城天守台石垣周辺発掘調査の右上にあります。図を見ると、創建時の折り込みという、図が少し両方違うんですけど、6 番というのはどういう意味を持っているのか。肌色のね。この図と6 ページの図と、説明を聞きそびれたのかもしれないけれども、何が違うのかよくわからなかったんですけども。</p> <p>もう1 点いいですか。この図面、右の端に縦に2 本、へんてこなものがありますけれども、これがひょっとしたら左側の掘り込めというか、地形の時に伴う、何かここに構造物があったのではないかという、その脚というか、杭の跡ではないかという話があって、それが石垣に並行してあるんだということが面白いなということがあって、それでC 地区を東西の方向に少し広げてみたらという、ご指摘をさせていただきました。結果的には、どうなったのかなという。地山の確認を行うために調査というふうに、3 月以降の時にご説明があって、その時に精査したいということのようでしたけれども。</p>

	<p>今は、この肌色をした部分と6ページの上の部分の図の違い、それから右側の縦の棒杭のような痕跡について、これ以上拡張あるいは精査して確認されたものがあるのかどうかというあたりをご説明いただきたいです。</p>
北垣座長	事務局、よろしいですか。
事務局	<p>こちらに示したものは、先ほどは地形根切という言い方をしておりました緑色のラインのところの土です。ここは、これが地形根切だとすると、これは創建時に埋めた、石垣を積んでから埋めた土ではないかということで、創建時の掘り込みという土に表現させていただいています。</p> <p>もうひとつのご質問については、5ページの写真をご覧ください。ご指摘がありましたように、これはC区の西側の断面です。このあたりに結局その杭みたいなものがありました。こっちはまだ掘っていなかったの、こっちは掘いたらわかるのではないかということで下げていったんですが、ここで、地山と認識したところで下げていきましたところ、先ほどもご説明しましたように、こういったかたちで瓦を含む掘り込みが出てきました。このあたりで探してもまず掘り込みはなかった、杭状とか、木の根状のものは見つからなかった。こちらのほうには瓦のほう掘り込みにおよんでいたということで、これ以上ちょっと掘るのも難しいと思い、この面では検出に至らなかったということで調査を終わらせていただいています。</p>
赤羽副座長	瓦類が散乱していたというのは、地山の直上になるわけですか。
事務局	ここではそういうふうに認識しました。
赤羽副座長	その瓦を取って整理しないと、地山の上面の状況というのはわからないんですね。
事務局	はい。
赤羽副座長	それはやっていないということになりますね。
事務局	はい、そこまでは。ここが、このラインで検出していました。こちら側は地山面を出していると考えています。
赤羽副座長	それには穴のようなものは確認できなかったということですか。
事務局	はい、そうです。
北垣座長	これはですね、ご意見の中で土層図の問題が出ていますね。土層図が、ここに紹介されていない。そのために非常にわかりづらい。今、かなりいろいろな課題が出てきているようです。私個人としては、例えばこの一連の大天守の地形根切というような、こういう構

	<p>造物が伝統的な技術としてきっちり遺されているな、というところまでは伺えるわけです。これが必ずしも地山を根切しているというような話ではなくて、もっと大天守台そのものを受けている地盤そのものが、例えば宝暦の段階で、どうして古い石垣を解体して、そして宝暦の段階で積み直したのか。こういう非常に重要な課題が、今日のお話の中ではまだちょっとわかりにくいかなと。それから土層図の問題。これはきちっと出していただいて、それぞれの回答をしていただく必要があるのではないかと思います。</p> <p>時間が12時ですよ。次のところもありますので、この話は今日はここで止め置きにしまして、そしてもう一度、再整理をしていただく必要があるかと思います。あともうひとつ課題があり、これも重要なものであります。特に、大手搦手馬出を先ほどもお話ししたように、10年以上やっていますね。これも組織の問題を含めて、これから今年度と、来年度にかけて本格的な解体調査、そこまでに至るいろいろな手続きがあります。事務局としては、どういうふうにお考えですか。実は委員の先生方の中には、もう次のお仕事がありますので。</p>
事務局	<p>北垣様からお話がありました、今なかなか、全てこちらのほうで整理ができていないところもたくさんあります。こちらについて、今のご指摘も踏まえて、一回整理をさせていただき、まとめて、また部会を開催するかたちで、一度また説明をさせていただきたいと思えます。</p>
北垣座長	<p>そのことはわかりました。ただ、この一番最後の天守台石垣周辺追加発掘調査予定位置図というのがありますね。これについて先ほど、触れようとされましたけれど、止ってしまったので、これについての方向性だけ出していただけますか。</p>
事務局	<p>追加調査についてご説明いたします。3月6日開催の石垣部会において、石垣の発掘調査の状況をご報告し、ご指導いただきました。その際に、内堀の堀底の状況や、天守台石垣の構築に係る地形根切の範囲などについて、石垣保全等に係る情報を得ることを目的として、追加の調査を実施したほうがよいのではないかとご意見をいただきました。先ほどご報告いたしましたように、今年度に入りまして、昨年度の調査の成果をまとめていく作業と並行して、いただいたご意見を踏まえ、追加調査の実施箇所について内部で検討を行いました。今回、資料2で追加発掘調査予定位置図の案を示させていただきます。</p> <p>昨年の調査の天守台、大天守北側のD区の、一部重ねて設定した調査区です。ここでは築城時と宝暦期の積み直しの境界部分が位置する場所の根石の状況をさらに確認することと、および昨年度の調査では十分に確認ができなかった地形根切の範囲について、十分に確認することを目的として調査区を設定しています。</p> <p>次に、天守台西側の内堀の中央に、南北方向に20m間隔で小規模な調査区を図面上で設定しています。ライン上に調査区を設定することによって、内堀の堀底の状況、また築城時の盛土の状況を総じて確認することを目的としています。</p>

	説明は以上になります。
北垣座長	<p>その審議は、今日はできませんのでね。残りを次回にのぼしてしまわなければいけないと思います。</p> <p>文化庁さんがみえているわけですけど、今の状態でこれから追加の処置について、何かご指導いただくことがありましたら、このままでいいのかどうか、何かいただくことがあるかもしれませんからね。</p>
中井オブザーバー	<p>追加の調査については今、前年度の調査の内容では不十分だということの意見だという感じがしました。貴重なご意見でもありますので、今言った目的の3つが達成されていないのであれば、次からの発掘調査等を検討していただくのは問題はないと思います。場所については、こちらで議論していただいてもいいですし、別途、時間的に調査期間があるのであれば、次回の委員会がいつ開催されるかわからないですけど、追加の調査についてはここでいいのではないかと。場所については細かいことですので、それは事務局と最終的に相談された上で、文化庁へ提出していただければ、それはかまいません。ただ、追加指定がいいかどうかだけは、今日決めていただければ。場所が場所ですので、大まかな趣旨がずれていなければ、それは結構です。</p>
北垣座長	今のことでどうでしょうか。赤羽先生。
赤羽副座長	<p>前回の石垣部会の時に、ずいぶん地山と盛土の層の関係というのは、先ほど図面でもご指摘がありましたように、けっこうバラバラで、つかみづらいというところがあります。やっぱりプライマリーな状態での地山と盛土、しかもそれらが石垣に影響を与えない場所で調査をするということで、堀の真ん中を掘るということでは、一応妥当ではないかと思いました。</p>
北垣座長	それでは一応、調整をこれからさせていただくということで、事務局としても了承していただけますね。
事務局	はい。調整させていただきます。
北垣座長	今日はちょっと時間的に非常に急ぎましたので、最後まで案件が進みませんでしたけれど、これもちまして本日の話し合いは、会合は終了させていただきます。
事務局	<p>北垣座長、構成員の皆様、オブザーバーの皆様、どうもありがとうございました。先ほどお話しましたように、今回ご指摘いただいた部分を一度整理して、今回会議で論じられなかった部分もありますので、早急に日程を調整させていただいて、部会を開催し、またご審議いただきたいと思います。よろしく願いいたします。</p> <p>本日いただいたご意見を基に、整備事業のほうを進めていきたいと思っています。今後ともご指導、ご助言をいただきますよう、よ</p>

ろしくお願いいたします。

開催日についてはまた調整させていただきますので、よろしく
お願いいたします。以上をもちまして、本日の石垣部会を終了いたし
ます。長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。